

俳諧資料カ一ド

年代

編者
(筆者)

書名

備考

⑦ 改

(下垣内蔵)

季寄
註解

改正月令博物箋

六月部

三



六月部目録

△印あるは非指
の季と持物

○養生の法。雨の考。米の豊凶。
○妙茶の方。其外人家聖法の支え。
○支えの定り。其目録よりあるもの。

六育

卦 月 調 名
陰陽生 調子 名
六丁

△小暑節 六丁 △大暑中 六丁

日令

此部は六月日の定り。其
支えの定り。其目録よりあるもの。

△氷室 △氷鏡 六丁 △忌日の神飯 六丁

△献醴酒 六丁 △一夜酒 六丁

△勝曼祭 六丁 △富士詣 六丁

△六月會 六丁 △天取節 六丁

△水貯 六丁

△祇園會 六丁 △山鉾 六丁

△舟舻 △笠舻 △岩屋 △白出山 △孟宗山
△郭巨山 △琴破山 △蟠崎山 △自來天山
△太子山 △木賊洲山 △芝刈山 △山伏山
△花盗入山 △天神山 △鷄舻

△御射御占 六丁 月次祭 六丁

△神合食 六丁 解舟御祭 六丁

△祇園會 六丁 竹生嶋祭 六丁

△津嶋祭 六丁 芦御興 六丁

△熱田祭 六丁 祇園時祭 六丁

△江戸山王祭 六丁 富士雪解 六丁

△嘉祥祝 六丁 嘉定喰 六丁

○神直 六丁 外宮御祭礼 六丁

△志渡寺祭 六丁 博多祭 六丁

△相國寺南無法 六丁 柳夏神樂 六丁

△内宮御祭礼 六丁 嚴嶋祭 六丁

△賀茂屋洗祭 六丁 糺涼 六丁

△鞍馬竹切 六丁 上瀬波御萩 六丁

△稻荷祭 六丁 座摩御萩 六丁

△愛宕千日詣 六丁 天満天神祀 六丁

△天橋立祭 六丁 節折 六丁

△水無月能 六丁 鎮花祭 六丁

△水無月能 六丁 道敷祭 六丁

△川社 六丁 形代 六丁

△小堀子神 六丁 茅の輪 六丁

△上賀茂水無月能 六丁 住吉御萩 六丁

△唐崎千日詣 六丁

月令 此部より六月一ヶ月日の定まるる夏とあり

△土用干 六丁 施米 六丁

△雷鳴の陣 六丁 香蒿散 六丁

△夏節 六丁 霍乱 六丁

△浚井 六丁 三伏 六丁

九夏三伏 六季 ○萬鬼行 六季

水掛合 六季 △竹婦人 △竹奴 六季

籠枕 六季 ○漆取 六季

鴛鴨涼一 六季 △船遊 六季

汗流 六季 △白袋 △掛香 六季

簞 六季 △泉 △泉歌 六季

清水 △清水の淵 △清水むら 六季

雲峯 六季

時令 此部より六月一ヶ月の時 候の如く事と一り

土用 六季 △夕立 △白雨 六季

露涼一 六季 △夏露 六季

風薫 △初夏 六季 △青嵐 △暮暮 六季

暑 △海暑 △極暑 六季 △日盛 六季

訪暑状 六季 同報卷 六季

涼 △涼風 六季 △納涼 六季

晩夏 △夏休 △夏果 △夏多 六季

草木 此部より六月一ヶ月の くら木の種類とあつむ

百日紅 六季 △苧麻 六季

綿の花 六季 竹皮散 △竹皮脱 六季

烏扇 △あさり 六季 △玉簪花 六季

釣鐘草 六季 △鶴藤草 六季

馬鞭草 六季 ○猫見眼睛草 六季

剪春羅 六季 △虎尾 六季

昼白 六季 △夕白 △朝花 六季

瓢びく 六季 南陸花 六季

山慈姑 六季 △鷺鳥州 六季

蒲穂 六丁 蘿摩 六丁

△赤草 六丁 △慈姑 六丁

△河骨 六丁 △菱花 六丁

△蓮花 六丁 △蘭の花 六丁

△荷葉 六丁 △蘭の花 六丁

△蒲刈 六丁 席草 六丁

△菅刈 六丁 △藍 六丁

△田草取 六丁 △青田 六丁

△林檎実 六丁 △早挑 六丁

△青鬼燈 六丁 △青蕃椒 六丁

△藁荷子 六丁 △凌霄花 六丁

△風蘭 六丁 汐見坂 六丁

△神馬藻 六丁 △瓜 六丁

△大豆 六丁 △小角豆 六丁

△甜瓜 六丁 △瓜皮 六丁

△白梵天 六丁 △干瓜 六丁

△熟瓜 六丁 △菜瓜 六丁

△南瓜 六丁 △南京瓜 六丁

△阿古陀瓜 六丁 △栝花 六丁

△紫蘇 六丁 △蒜根 六丁

△胡荽 六丁 △藕突 六丁

△夏切茶 六丁

種植 水とまぐ。さうねい

生類 此部より六月一ヶ月のいき物とあつたしらす

△燈蛾 六丁 △蟬の法声 六丁

△蟬脱 六丁 △空蟬 六丁

△林鐘の林おき衆之鐘かねの裏うらにあつまる事こと物もののさくありまるといふ

○鐘かねと鐘かねしてさやりのかひなく
昏くらして誤あや入りといつらう△風待月風

の稀うすなり月つきまれいつらう△水無月
水みづありと云畧りやく△鳴神月雷多故名

莫傳 涼月

風かぜふけい沁ひは流ながゆるいつとあり
とくくま月つきのころよとをされ

藏玉 ところあり月つきとくくまの
りりちるい妹あなより見えんおまの

月つき結むすえり花はなのさくうらな

同 さらうを月

あしたをるあつ山のさくうら
松風月の夕ゆふをさそある

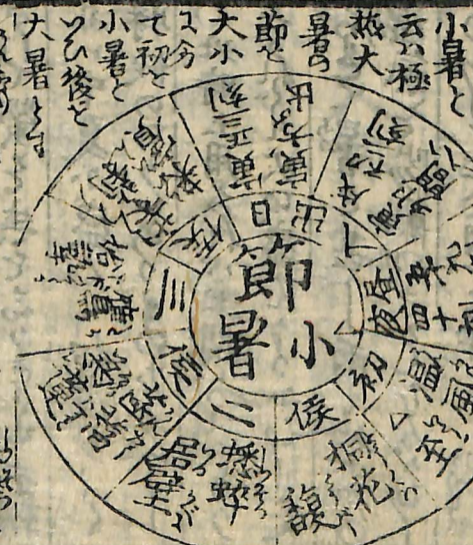
秘藏 いとくを月

わくきほちるさくうら
いとくくま月つきを初はつめらえとて

節

七十二候。草木七十二候。日の出
入。昼夜長短と記し註を加ふ

六月の節



△温風ぬるかぜの風かぜもあつてふ吹ふこ。蟋蟀せせがしも
つくもあつて秋の氣き近ちかくなりい

より生なしあられさくうら得動とくどうありそ
○雁かり鳥とり始執はつしやく手てとい鳥とりを取とる字あざと

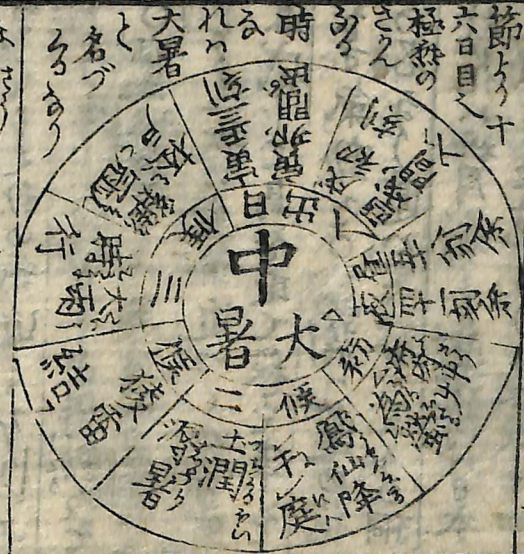
とくく秋の金氣かねき近ちかつくとゆ自然
お感かんして鳥とりを取とて殺ころすと事を

さす氣動きどうと○蓮れんの花はな蓮れんの花
の名なあり蓮れんの笑わらひ名なあり○桐

花はなの此月このつき香かほ。茉莉せせりの日本
よばさくうら花はなあり慶長十四

年島津家文佛ぶつ葉はモリ之花
を献けんせし事ことあり

中 △大暑。七十二候。卯木七十二候。昼夜長短。日の出入等左記ス。



時節より十
六日目に
極熱の
さかん
多
大暑
卯木
鳳仙花
土潤
暑
雨
風
雷
雹
雪
霜
露
霧
雲
霞
虹
電
雷
霹靂

○此時土用されば土潤よき暑あり
まろれど火の盛んなるふりしを
らして暑さ甚し雨も此土用の
湿氣を陽氣のさかんなるがし
のりして大雨と降ると。鳳仙
の鳳仙花の種と蒔く。鶏冠あひぢのさかん

日令 此部は六月日の定むる事支
の定りうと紀その祭の所は
扱とあるも大抵祭り同一の

朔日 天氣 風雨あれぬ米價貴し
○西南の風へ虫と主る

○日蝕あり 氷室の氷は
まは早し 四月朔日

九月盡まで献ぐり月のるは
今日と擧ぐ守 此時御膳み氷
と奉るそののちの仁徳
天皇六十二年額田の王子狩ふ
出さぬ氷室を見て土人小問
たまり土を一夫余堀りて草と其
上小菅氷をせしむれば極暑ふ
もどけごとく申す王子この氷と
取て仁徳帝ふ奉らせたりと
その始て民間よは是ふ准とて
△氷餅と祝ふ 俊成
△是日山古とて物乞の流るるを
岩のけりてはすすくま

詞 氷室の雷 氷室の清潤 氷室の

寺谷中宗延寺 四 六月 會
法花千部執行 日 傳教大師

忌日 寺々行子の坂
枕御年高と云く有 江戸 輪

天王 五 祇園會山 江戸
祭 日 京 日 初

牛頭天王祭 六 天貺節 宋
大傳馬町ニ目東 日 神

帝詔して今日と天貺
の節くつ人の不成就日 天氣 晴

ハ秋収多し 雨ふまハ秋水
多し 風雨ふまハ米價貴し

製衣神麴 今日も製すのふよ
一りし本州ふ委し

水貯 此日水と取淨き 晝に収め
貯ふ一年と越しともさ

らす此水よて醋樽酉油又ハ漬物
とさハ一年過ても懐をよと

京 祇園手水の井と開く鳥
丸三条坊門の南ふある井

今日より十四日まで蓋とひ
きとめ引松立しに往來の人々

水心とび 七 祇園會三社神
ゆりもり 日 輿今日卯の下刻

本社より祇園町と四条寺町
御旅所ふ十四日まで御出さ

○七日より十八日まで四条
河原に夕と夕みあり是と

△河原とくもとく
祇園今々何と被ふ人の山 保友

狂 引て来ると知れい道行ふ様よ
るや祇園の令者定離之行風

山鉾 卯下刻四条高倉より
寺町へ出松原迄下りる

より東洞院へ長刀鉾 函答鉾月
鉾行て自分の町々へかゝる△菊水

鉾 放下鉾 舟鉾 笠鉾 岩戸山占
出山 孟宗山 郭巨山 琴破山 蟻螂

山 白樂天山 太子山 木賊川山 芦川
山 花盛入山 山伏山 天神山 雞鉾

江戸。神田天王祭。南てんま町御出の品川天王祭。両

社の御輿中の橋のうへへて行合南北へふる故は行合の橋と云

日八 江戸。浅草天王祭。神田天王御帰

日九 京。北野天満宮九度。江戶。東向の観音堂より

鳥越明神祭。隔年子寅辰の千住橋の上より綱を引合年豊凶と云

らふ事十日 御射之御占。今ふらふと

神祇官の官人主上の玉射より御射く事と占ひ奏と云

より公事根 京。吉田西天王祭。北源又見と云。叡山惠徳院源信

江戸。神田牛頭天王神輿小船町御旗。今日は出十二日

日十二 月次の祭。十二月の御諸神へ御

幣と奉り 神今食。伊勢大神のいとく

申さるい天子ふりく神膳と供せよのふりく

と多めとて今をたふるすはまらと神もわらよのどはやく

京。松尾神。二十日。天氣。今日烈風と云

と邦芳譜 解齋之御粥。日の御座は大珠

を立御粥ありき土器又和布の御汁物と云

免さんて御器と云るあり 京。祇園會山

船引初 堺。大寺三村。不成。日。執日。明神祭

京。松尾神事能△祇園會。卯下刻山鉾三条京洞院

より寺町へ出四條へ下りてより西へ行自分の町々へ歸る。橋舟慶

山。八幡山。悪ふく山 宇治の合戦淨明乗る衣より

役行者山 山の名より

鈴鹿山 觀音山 鷹山 黒主山

船鉾 ○未刻神輿三座御旅所四

条寺町より西へ渡り少將井の

神輿三座ハ四条東洞院より上り

二条と西へ御城の前と大宮へ出三

条大路を御神供社へ至りなす

三条黒門通の角より 二座の神輿ハ四条を

とくふ鳥丸へ出をれより松原へ

下り西大宮迄行北へ上り三条御

神供所より至り三社の神輿一所ハ

會一のハ此所にて神祓と奉る時

奉り一十團子十音 諸人よあそびをくむをれより 行列と

改め三条と東へ寺町を四条本社へ

還御 俳 しくやまて出るとん

のまゝト琴へをりてやせき

くしくり乃ハ曾呂利 江

戸 龜井戸香 大坂 難波村午

頭天王祭

近江 △竹生寫祭 日今明 尾張

△山王祭渡り初

△津島祭ハ明日ハ 五 京祇

△芦御輿△熱田祭 日

園臨時祭 勅使立あづ

まのせびを

奉らると公事根源みあり

とんれとも今ハへては ○淨花

院垂拂○吉 江戸 △登山王祭

田小角豆祭 礼隔年丑

○赤坂氷川大明神祭 隔年

○浅州觀音祭 今日びんぎの神事

○芝浦小鰯網下と今日返ハ禁制

大坂 三津八幡神事 今昨○天王寺

講堂蓮華會 午の刻

富士雪消 今日むらう富士

の雪消さく

○ あ 万葉

ゆのひさうつむきまはるな月の

（連）さくはつ一見夏の日の宮有柏

十日 嘉祥祝 △嘉定食 △嘉定銭 へかつうの仁明帝の時

豊後国より白亀を奉る吉兆とて年号と嘉祥と改む一説は

同帝の時御代の栄を賀茂と祈ら

せり今日吉日とて御杖あり年号

嘉定と改むとあれも実記見寺

一説は室町家の納涼の遊ふ

揚弓を射て買ふるの嘉定銭

十六文を出ると嘉定の宋の年

号十七年まで毎年銭を鑄と

し先年毎ふとあり此元年

より銭十六 袖直 △袖留と

文を用ひしと 伊勢力 △外宮の御

とも今日袖とどめると振袖と着

し座鋪へ出て父母よまると人

盃をいそぎ乳母るととと盃

事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見るくくはよつて月

見の祝儀ともい故実なり御

作法は猶 伊勢力 △外宮の御 祭礼あり 故実あり

七十日 京 北野東向観音開帳十八日 △相国寺閣藏法の等

持院虫干の 大坂 △夏神祭 御霊

つ川夜宮祭 伊勢力 △内宮 安藝 △徽

御祭礼 祇園御輿流 今日み

八十日 京 くよおさ奉るの山崎

室寺観音開帳の桂川神事能

井大二乗山門の志の執行す

江戸 四谷天王祭 九日 観音祭

隔年也卯巳未 日成道

西亥の奎より

の日 京 △賀茂御手洗祭 十九日

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

△座頭

の納涼の清涼菴（あまのついで）の寺へあがる

狂（あまのついで）の寺へあがる

宗増

今日雲（あまのついで）の寺へあがる

京（あまのついで）の寺へあがる

西観堂（あまのついで）の寺へあがる

青竹とて又（あまのついで）の寺へあがる

江方観音堂（あまのついで）の寺へあがる

妻入法事（あまのついで）の寺へあがる

声（あまのついで）の寺へあがる

入（あまのついで）の寺へあがる

大坂（あまのついで）の寺へあがる

院御景御開帳

座摩（あまのついで）の寺へあがる

の道筋（あまのついで）の寺へあがる

本町へ出場（あまのついで）の寺へあがる

より東へ大津町（あまのついで）の寺へあがる

同一く申（あまのついで）の寺へあがる

久太郎町（あまのついで）の寺へあがる

北三京（あまのついで）の寺へあがる

京（あまのついで）の寺へあがる

江戸（あまのついで）の寺へあがる

本能寺（あまのついで）の寺へあがる

天満宮（あまのついで）の寺へあがる

名越の御（あまのついで）の寺へあがる

大坂（あまのついで）の寺へあがる

神輿二座渡らむの天神橋通を大川と下の濱側へいて難波橋まで是より舟を置き大川と並びと島おりの宮へ入る夜に遷御

丹後

△あまの橋立まうり ○切通戸文殊會

越前

日永嶽祭 冷日 北八日 常の祭請あり

北七 京

本國寺虫干 北八 京嶋 大徳寺奉書 日

住吉祭 ○妙心寺方丈虫干 ○加茂水無月餅 今日より晦日まで

北九 大坂

玉造稻荷夏神樂 ○内平野町神明同断

晦 不成 就日

天氣

風雨あまの米 賤しめは南

節折

竹も主上の 御への寸法

をとりて其やどふ折めてくいのよ とうとういかりよりの命婦官

主よ仰せて御 扱とつとひらる

鎮火祭

部

氏の人火を打て官城の四方の隅 として祭事火災をふせぐが爲に

道御食祭

是も都の四方 とも鬼魅の他

方より来るを入まじくせんを ぬ路上は供物をそのへ祭るる

大扱

昔の百官のくく 朱雀 門の出て扱をなす麻

の葉を切て扱すらむへ麻を扱 草といひんえの此水無月扱の

と詠多し春より夏あつつ 春の木夏の火とて木生火と

其外も皆相生あむらひの夏より 秋よりつるの夏火秋金火尅金

と尅するを扱とくする 然るま ども土用四季のあつて夏の土

用を以撃す是中央土用の 位するを以てするくおおつて

んと抜ひ川 こゝろ 小蠅ふし神 の

よく悪邪多きといふ日本記の
いづ是れ夏の熱邪といふなり

⑤ さそふ 今月の名物のつくしんと云ふ

茅汁輪 午頭天王燕民將

疫病 さそひ 時是とされ災難 連之
非振神と信じて居る茅汁輪の 翁詔

京 ○ 上加茂氷無月能
○ 建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸 ○ 浅草寺芭講
△ 佃島住吉の御後

大坂 △ 住吉御後 所々より移り物
櫛の挑灯いらくの如かりに

手とけりて渡る午の刻頃よ
こゝろ鷹野師社人社僧神

馬等かど限りもなく次第の
列を守りてこゝろ四社の神輿

と祭奉る社務の車として反橋
の本小立る、神輿一社七度

北濱小出奉り潮りてりい
ころのいをれより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと
と奉り夜よ入、神輿住吉へ遷幸

其節堺より送る者住吉御り人多
火ととも夏昼のとは是と火替と

⑥ 狂 儀儀と神りは夏のともひりて

令と冠せぬ
近江 唐崎千日
黍り御後

月令 此部より六月三日
の定よりこゝろ事と記す

土用干 △ 虫干 △ 虫拂の書衣等
の中は白奥と去之故と虫干云

⑦ 非 媒今時の枕を土用が、其角
接脳小世をさぐりこの後うか

京 妙心寺虫干 ○ 天龍寺虫干
○ 大徳寺虫干の定日

施米

山寺の僧は米塩を乞ふ
公より下さる○年中行事

この月のきふよりあてあられず
君のちんごきの秋のこのときは

雷鳴之陣

かきこりの声
三度高くさ

色は大将以下近衛の次將迄
弓箭と帯し御殿は孫廂は

候して天子と守護し奉る
と公事根源寺小見へり

香薷散

暑氣の頃専ら
用る菜方なり

暑氣のわづらうとらうとらうと治を
○香薷散は蘇合香丸

夏節

小兒の頭面は無名
の腫物つらうとらう

霍乱

病の名は夏瘧
霍乱妙菜陳皮生姜

水煎用ゆのめりの根は○芦
花葉とてんく吞てう○たでの

実香薷散とてのじべり○又法
わしと移りやをふつてより

浚井

曝井ともかく井戸
替の事し新井の義

あて夏日井と新よとれは瘟病と
やますと見へりむうへ此月

井水と替しとまり合へ七月
よ井をらさうふことなり

三伏

三庚閉日ともいふ夏至
の後第三の庚は日を

初伏第四の庚を中伏立秋の
後最初の庚を末伏といふは

くの本篇博

占候

三伏の
内西北

の風あれは極月氷り多し○三
伏よりと熱すれば冬雪おし

○三伏の内嫁妻とれべありし
○木と伐はう虫むむとれし

九夏三伏

九夏の夏九十日
へ三伏の詠は記せ

萬鬼行

後漢の時伏日よハ 鬼出るとて盡日門

戸を閉めあひハ湯餅を作りて 辟鬼と名づくところの秦

のくたやいろははかりて祭 をさし 虫災をぬせごとし

水掛合

夏戯まよ水辺杯よ て水かけ合とるといふ

竹婦人

竹奴△脚馬△抱箆と べて竹の箆といふ

或ハ足とりとせきとて涼 いかしむふふのりあり

俳諧よ吹ひ先ひくハ婦人勝英 ださ翁や妻がてきのみ々ハ其角

箆枕

竹とりて是とつふ 竹細工の名地所多出也

漆取

うふし乃樹ハ中 心黄ぬしてかき

水ハ値て齋アかじ刀弁 と以樹の皮ハ切目切らけを

後憂ドて黒色あり此汁と 多りておけハ白汁滴ア出

多く此職あり組ハ篋ハ 取る物ハ是湿漆より塗

野より出るハ奥州羽州下 至て下品うろくところハ

日本と上品とハ唐土の塗 銀朱ハ合とると用也越前

ハもまごよめハ故ふりろ 〇此実より蠟をとるとあり

死鳥鴨涼 此外月露な ともれハ夏の季よありあり

とともれハ夏の季よありあり 〇此実より蠟をとるとあり

とともれハ夏の季よありあり 〇此実より蠟をとるとあり

船遊

⑥大名の我味とるや
舟あそび 季州

汗疣

熱拂瘡ともいふ。夏
身うちよこぬる物

その切口くくさうしてよー。又

つぎの土紙粉ぬりてつけてよ

し。又天麻粉とほめて妙く

白袋 ⑥掛香 ⑥掛香 ⑥襟ぬ
いさむ妻の衣 青が

⑥在 ⑥又藤とあそぶるもあり

⑥下子かいらの中よあれま 久清

⑥簞 竹のあこころ庭より暑中
是とあそびて暑とこる

⑥泉 ⑥泉殿 ⑥龍殿 ⑥泉とハ水の流さふ
たてる家之殿とハ家の事 ⑥龍殿 ⑥
瀧をこるなま瀧のとはふ建る殿に

⑥方 堀川百首 永緑

弦み子の袂とく成ゆい
いづも小秋はとむるやあらん

續後拾 泉辺避暑 公通

若のむと若弦とあそぶるま

下よの夏もあそぶるけり

雪玉 水風晚来 頭季

夕けあよ弦ハ泉もあはまを
志が笑乃うし風涼かりたり

散木 對泉忘暑 家経

下るふ思ふるのあはれあうや
あふこの風をわける人もあ

月清 對泉述懐 俊頼

身たうれふ志とあうたる歎をい
玉井の水もえやの清光森

玉吟 深山泉 家隆
人かたは清あひあふまうまひ
任されよけれふ乃下るあ
雪玉 樹陰散泉 贈左大臣
松子の雲より清あむとあふ
ワダチあひらうは秋はこにたり

を空より出く雲のやうなるれども
 左ふかひ水氣と陽氣とてしり
 のぶとく次第ふ立上り下より
 段く上と時の白き氣集りて
 山ぎの所次第ふ黒きぐらふ是
 によく水氣の多く上りにより
 てるれ雨ふ或の白雲り中
 天こそ高く立上らむ横へかび
 けの雨ふ其故の下よりつぎ
 上と氣止むにより上りし水氣も
 陽氣とて散らるゆへ横へるびく
 かり山ぎの根とくふらふと
 ふも上り水氣つとたつ故るれが
 つと上と氣さきふより上へ上り
 たるも散りてふび山林多と
 野の水湿多といふより度く
 夕立とるなり山ありても元山の
 水氣あり富士山と山のふりく
 より中途もその材木ありにより
 地中より水氣上り雲をかへ

ともくきふ雲あり山上のまが
 山ありによりてその夜電光すは
 其方角より雨ふと是も水氣
 の上りく水氣上るといふも陰を
 かりあり上りてあつて陽み
 むされて陽氣の如く上る其陽
 氣発出する時ひくく火のあ
 るを見らるへけりく黒くとく
 ども火燃るどめて多くをもちを
 本性をあらわしてあり光も陽
 氣の上りけりれども故ふ此も
 ぶ方より上りての烈く時直
 けりゆかりなる時の翌日ふらと

新古今

公経

あすする春のあまのさるるびま
 一しむさむのふらりなるを
 千首 夕立早過 後拍原院
 あつかりたがけのまのくまを乃
 玉葉 旅夕立 伏見院
 糸川とくあまのふらりなるを

送之ヲ。聊具ニ捧呈ノ。献呈ト。

奉上ノ訪問ト。窺光震之志ヲ。

訪起居ノ報平安ト。

同報答ト。左尺牘方ト。

訪使ノ殊異氣ヲ為ス。至ニ。

勞介使ノ訪炎旦ト。被惠ト。

鮓ノ一桶ヲ。魚ノ醃ノ一器ヲ。幸饗ト供膳ト。

之客ノ。美味可賞ト。殊思ト。

須謝ト。

暫待來會ト。

尺牘ノ。尺牘ノ。上中下ト。

日ノ熾日ト。蒸暑ト。被惠ト。厚賜ト。

勞介使ノ傳命ト。走使ト。炎日ト。燠ト。

嘉惠ト。被投ト。分賜ト。魚醃ト。魚醬ト。

美肉ト。饗食ト。供ト。偶有ト。客至ト。共ト。

美可愛ト。殆潤ト。藜苳ト。之膳ト。殊恩ト。

須謝ト。拜而受之ト。愛我至矣ト。

九拜以謝ト。暫待來會ト。期顧ト。

問ト。叩謝以面ト。待問尋ト。

尺牘ノ。尺牘ノ。上中下ト。

日ノ熾日ト。蒸暑ト。被惠ト。厚賜ト。

勞介使ノ傳命ト。走使ト。炎日ト。燠ト。

嘉惠ト。被投ト。分賜ト。魚醃ト。魚醬ト。

雲連海氣琴書潤

水殿涼

風帶潮聲枕葦涼

青琅玕

沙界樹涼晴作雨

看衣巾

石渠泉聲暗流水

涼風來

何以前煩暑端居一院中

眼前無

詩 暑之詞

長物窗下有清風

為空室

與人同

晚夏

秋近

草木

百日紅

苧麻苧

麻

繩

スイトツル

セイロウカン

スイトツル

イキニ

カゼキタル

カゼキタル

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

眼前無

麻

△櫻麻花の柄は似たりあり
△夏引の糸のあまの事なり

△麻刈の俳よ麻刈の夏とよ
△漢麻。黄麻。麻仁。油は制と
麻の皮とよだて糸よとよ

夫木

寂蓮

賤の女がふとくしとよ居る
さうあさすうあまの下風

土御門内大臣

夫木
かうさよとあまの立枝のさう
えん味奈よるわのけよま

①朝起の紗うまそのかせさ
徳元

②花青さ穂をまとの出羽最上
の産よ一奈良晒を織るの

③和名かまひ。真苧
麻

是より東国西国若く植も畿
内東南よいふ瓜うて麻と作る

綿の花

ひかりは穀皮と
りめて衣服とす

是を木綿とらふ是紙のとき
今衣服又織るふ木綿といふ
古名と用ひるなり神人の用
る木綿たよれも古来の言なり

中世民用専ら麻布と用より
今の州綿は桓武帝の朝は異
国より傳りる唐土より宋乃
末とる植る本朝より二百年

中絶したるを文禄年中に
種を得て諸国に植る多田
綿花黄も実白く糸よりけよ
尤可けよとよ少なり今これを

とよの蝦手綿葉よ深さき
さみあり白花あり桃大キと白
然まよと桃よまよの神樂綿

花白あり黄るるありさるて
生す神巫の持つ所の鈴花と

是と植て大に利あり。○佐利綿の枝葉赤色を帯ぶ。桃多し。昔姑この種を得たり。聳々い望めども種をあらへむ。聳憤。恨として其妻を去りし。又依て佐利綿といひあふせうと。○烟草綿

△その葉青色は中間に小葉を生と
⑤ 新撰六帖 家長

あまの木のたねのあまの木の
うへて綿のたねのあまの木の

竹皮散 △竹の皮脱ると云
ても季にうるべし

鳥扇 △ひのあまの木の本州は射
干と同物とす然と

花形ちぐりり 莖葉るぐりり
の長さととれり射干より莖
短く葉扇のごとくあまの木の
ひのあまの木のたねと和名ふと
一種として射干とあまの木の
と訓とるよより連俳にも

射干とかくあり

⑤ 夫木 西行

遂生いさるりあれとるの面
かすあまの木のたねとあまの木の

玉簪花 白鶴山。大さるりり
と俗に亀やじと云

釣鐘草 地参の紫花とい
らく形釣鐘の

⑤ 又白花淡紫の花あり
俳の詩をよはふ付う名に越人

麒麟草 高さ一尺とあり
形亦鹿草に似たり

馬鞭草 馬折の鐵莖葉
花をち色ちて穂の

⑤ 夫木 俊成
紫のる小遠あやへふまのつら
むつらげなうせふとあまの木の

猫見眼睛草 澤漆。此
草の形

燭臺のこたた故。燈臺艸くも野は多く自然と生さるる

剪春羅 春羅。漢宮春。眼皮の俗字あり

花の大きき錢のぶく

狂人のふりつる所都はまると

虎尾花 花白く虎の尾の如くふ似る

書顔 鼓子花 旋花

俳 空教は米搗こむ衣之芭蕉

狂 孝子やの屋上りどもふかそと

夕顔 壺盧 瓠瓜 朝の花

六月頃白き花用く昼は赤も夕方は咲く故に名づく

夫木 定家

つらするを方人の神うとよあゆふし移さゆふふれむ

首 垣夕白 為尹

か松さりの竹乃わ経末うて

詞 白雲 あゆぐある。それあてる。根。矮く高難。光りある。咲て

連 夕白のあざかせる法は宗春

俳 夕白や一白の守花の衣其角

夕白のまゆじき垣根うか宗養

夕白や一白の守花の衣其角

幸結白花了 松虫声不去

寧^{ニシロ}辞^ジ青^{シヨ}蔓^{マン}除^{ジュ}

暮^ホ雀^{シヤク}意^イ何^ニ如^{カニ}

瓢^{ヒョウ}。味^チ其^ノ故^コ苦^ク瓢^{ヒョウ}對^{タイ}。てかんひやうと名づく形色を看

瓢^{ヒョウ}の^ノか^カ物^{モノ}の^ノ長^{ナガ}ふ^クべ^ニま^レれ^タ浪^{ナミ}花^{ハナ}木^キ津^ツ難^{ナニ}波^ハ今^{イマ}宮^{ミヤ}任^ニ吉^{キチ}

炭^{タン}斗^トか^クこ^ノま^リ一^{ヒト}名^ナ盒^{コウ}盤^{パン}蒜^{ソウ}菰^モ

蘆^ロと云^{イハ}かん^ヘい^{ヤウ}と^シく^ハ瓢^{ヒョウ}と^シかく^ベい^ハ瓢^{ヒョウ}ハ^ヒヤウ^ウの^ノ音^ネ小^コま^マ

浮^ウの^ノ意^イこ^ノろ^ノり^テ酒^{シウ}器^キ小^コ制^{セイ}

制^{セイ}ア^リる^ハ瓢^{ヒョウ}葦^イとい^ハふ^コと^シ知^チべ^ク

千^{セン}瓢^{ヒョウ}救^{キウ}力^{リキ}新^{シン}千^{セン}瓢^{ヒョウ}の^ノ土^{ツチ}用^{ヨウ}

寸^{スン}河^カ内^{ネイ}根^{ケン}津^{ジン}多^タ一^{ヒト}伊^イ勢^{セイ}

苦^ク瓢^{ヒョウ}。瓢^{ヒョウ}葦^イの^ノ類^{ルイ}は^ハて^テ別^{ベツ}種^{シュ}味^ミは^ハじ^キ

夫^{コノ}木^キは^ハは^ハろ^ク花^{ハナ}を^ヲ好^{コト}む^{コト}ひ^{コト}慈^ジ姑^コ

商^{ヤマ}陸^{マシ}花^カ花^{ハナ}白^{ハク}赤^{セキ}あり^ニ白^{ハク}花^{ハナ}

山^{サン}慈^ジ姑^コ俗^{ソク}黒^クく^スく^ス花^{ハナ}淡^{タン}

鷺^ロ草^{ソウ}花^{ハナ}白^{ハク}く^ク鷺^ロ又^{マタ}似^ニたり

花^{ハナ}白^{ハク}と^シ鷺^ロ十^{ジュウ}羽^ウ飛^{トビ}小^コ形^{ケイ}は^ハ似^ニたり

蒲^ホ穂^ソ香^{カウ}蒲^ホ穂^ソの^ノ形^{ケイ}鋒^{ホウ}に^ニ似^ニたり

花^{ハナ}紫^シ白^{ハク}色^{シキ}秋^{アキ}実^ミと^シ生^ナと^シ生^ナと

綠^{リョク}豆^{トウ}花^{ハナ}黄^{ワウ}之^ノ和^ワ名^ナや

茨^{ソウ}實^{ジツ}花^{ハナ}紫^シ花^{ハナ}の^ノ下^カに^ニ赤^{セキ}

草^{ソウ}水^{スイ}草^{ソウ}の^ノ正^{テイ}字^ジ慈^ジ姑^コ草^{ソウ}と^シ云^{イハ}



菊の花の隠逸あるもの牡丹の花の富貴あるもの蓮の花の君子あるものありと

○丈治百首

西行

とちかふる月のひかりをせむは池よ
ところろとえてれさうきさうか

夫木 蓮開水上紅 千里

秋近く荷をさくさくあけつらん

とれる井ふくく色ぞこころ

山家 蓮満池 慈鎮

とちかふる月やどるをいづれば

池よ蓮乃花とたふあふ

詞 白の池の心すめ 風月まゝ蓮

羨れあふらん月 蓮はあふらん

中守 秋の蓮の香を蓮の上より

かきたうの池の中よりまはるる

とちかふる池の心すめ 風月まゝ蓮

蓮 あふらん蓮の香を蓮の上より

濁りぬる池の心すめ 風月まゝ蓮

○俳句 蓮の香に歌はれし蓮は其角

泥坊の教へ水のしらとて 全

狂 花瓶の小さき蓮とて 全

とちかふる池の心すめ 風月まゝ蓮

もまろくまはるる蓮の心すめ

生佛りや人なりまう 種好

○詩 蓮五字對句

同上

白蓮吹次缺

稻花千頃外

香藹坐来清

蓮葉兩池間

○詩 蓮七字對句

詩礎

蓮花直撲青天色

渚蓮愁

玉女常含白雪愁

上蘭舟

波廻片々青蓮出

識采蓮

日落山々彩鳳飛

採蓮舟

① 採蓮

崔國輔

玉淑花爭發金塘水亂流

花サカリナル頃ハ水相逢畏相失

並著採蓮舟花サカリノ頃ヲノバ

サバ花ノチリ失ニイ

遊ニト舟ヲモヨホスナリ

② 又 明 申時行

碧沼停寒玉紅蕖映綠波

白紅ノ蓮花ガサキテミドリ粧凝

色ナル池ニウツルナシキナリ

朝日麗香逐晚風多花ノ色ハ朝日

ニウツクシク香氣ノ薫游戲金鱗

出飛揚翠羽過オヨク魚トヒカフ

納涼依水榭還續采蓮歌

ス、ム所ハ水辺ノ臺ニアラビ

ウタヲツクツテタノレムナリ

③ 曲池荷 盧照鄰

浮香繞曲岸圓顯覆華池

香氣紛紛トレテ岸ヲメグリ圓ナル花

ノカゲイケノオモテヲオホヒカシス

常恐秋風早飄零君不知

秋早ク花ヲチテヤブレ蓮ト今ニナラン

コヲ知ラスレテナカメタマハントナリ

○金絲蓮紅花金色の筋あり

甚ど珍なり○大紅蓮花淡紅

色芭蕉の花ハ似たり花ありて

実のくす○天竺蓮花紅干葉一

列よりく昼夜一がまず○蓮

ハ子の名なり菡萏ハ花乃名

ハナリ菡萏ハ茎の名ナリ藕ハ

根の名ク荷ハ葉の名俗ワケナリ

④ 荷葉 浮葉と藕荷とハ

あつハ葉と荷とハ根と藕

とハ花を蓮とハ荷縫水芝

⑤ 夫木 定家

⑥ 蓮 夫木とハ白くを蓮ハ葉ハ

⑦ 排 ばえん水とのびる

蓮は葉や雨のまじり地の水かき道之
てす花を蛙のまじりまじりけり風光

狂君子とよみけり花のまじり葉に
波の味ゆきけりみそ先く七貞古

詩 荷葉五字對句

同上

緑水飯香箱

依崖假松蓋

青荷包紫鱗

臨水羨荷衣

詩 全七字對句

詩礎

桃花尚憶當年宅

荷花香

荷葉堪為卒歲裳

聞菱荷

新荷 唐 李羣玉

田々八九葉散點緑池初

ハジメテ葉ヲ生ズ所々 嫩碧纒平

水圓陰已蔽魚 葉イニ女若葉

同シ然レモ丸キ葉ハ 浮萍遮不

合弱荇繞猶疎 二サヘキラレテ

合スアサ、ノ水クサモゾリカ 半在春

波底芳心卷未舒 二カバハ波

蘭花 虎鬚草 碧玉草 燈心草

夫木 川のみをきくや河名のおいそ

指を押し皮をさして燈心を

出さる凡六斤を燈心蘭

玉用よ入て刈きり 豊宜の表不用

ゆらひ備後と上品とす女のす

きて此業とせげむ一日ふ二枚

席草 是ハ琉球とつて同

青魚燈 酸漿 青蕃椒

俗は南蛮胡椒。又高麗胡椒と云。秀吉公伐朝鮮時渡る故名付り

藁荷子 俗は夏あつと夏めづ。秋生とつと秋めづ。

凌霄花 異名紫葳。陵時

のせいじん 俗は夏の咲はとり人妻のうげ風鈴軒

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙女ノ名酒

宴せし トキ 醉裏従他寶髻斜 酒

遺下玉簪無覓處 エフテ髪モカクフキタリ

如今化作一 トシ尋レモミハス

風蘭 挂蘭。仙草。風と好て茂る故は名づく

林花 今其カンザニガ化シテ紫花ト咲出シト戯作レルナリ

非 風葉や風下 花黄 汐見坂 花黄

神馬藻 銚子の歳旦より 信貫

豇豆 小角豆△青さげ△十

非 瓜 種類多し多 甜瓜

瓜 瓜を上品とすこれふより今

瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺

瓜 瓜江戸の鳴子瓜尾州の音鷲

瓜 瓜を上下守駿河の府中根津

瓜 瓜水野和泉の堺舳の松これ

瓜 瓜ら皆名と得

非 瓜 瓜ら皆名と得

瓜の瓶小温公よりや高菜瓜超波

狂々つきてらごうに海瓜白田

先へ病さの張ら仇まらる千相

〇人く集りて万法の空也と法

問を出世し時寂蓮法師の御

空よかたえさのあるくべいで

け瓜は皮も妙

瓜皮 松山侯の御前

うて瓜の句へ有べと皮よて發

句やよとありける時其角畏りて

非 瓜の皮も妙 流るる

白梵天 梵天瓜の瓜の

種類にて白き

大和より出る皆白色なり

非 梵天の瓜や味も香もは桂葉

狂 名をまゝの瓜切らぬ瓜は

梵天瓜ぞよふ齋つかり高毒

詩 瓜五字對句

酒榼縁青壁 几攤梅福傳

サグウツワキロイ

瓜田傍緑谿 園摘邵平瓜

タニノホトリノウリ

詩 瓜七字對句

詩礎

羽扇揺風却珠片 動金花

一ハキノアスキノカサ

玉盤貯水割甘瓜 鄭瓜州

ギヨクバンタカハテミツラサクカニク

白社可容陶令酒 故侯瓜

ハクシヤベシイルトウレイガサケ

青門堪種邵平瓜 五色瓜

サケタカカワスト

瓜 瓜の名東陵より

故 瓜の美ナルヲ出ス

邵平秦ノ東陵侯タリシガ秦敗

レテ後布衣トナリテ瓜田ヲ作リ

シト 干瓜 白瓜を干てた

ナリ 干瓜 瓜を干てた

出るといふは瓜の小くしてよ

瓜六七月出ると大キカデ色青

りのことし、とす大坂の東黒門と
つ入所ふ作る上品とす唐の青

門瓜上品とす又偶然なるもの
非干瓜や、らふとすす餐小并其角

熟瓜 甜瓜の種類 菜瓜
味少し、かろ

甜瓜の種を時て 南瓜 寛
菜瓜ふ変する物有

の頃本朝へ種を得て長崎小作
ふそ、諸国よ、もろまる形ち

丸く、な、南蠻より
とる、南瓜の名あり

南京瓜 南瓜と同種類
形び、と、

かぶらや唐のすび、と、と、
地より其始出、と、

阿古陀瓜 是れ甜瓜の
と、

と、煮、と、
○南瓜の南京の阿古陀等夏の

季とも、又秋の季とも
と通俗志其外多く秋は

出、の、花として夏は用ひ
花と、として秋は用ひて可

る、ん、所存よ、べ、然
れとも時珍が説は南瓜をど

ハ九月花ひ、き瓜と、
とあり是、花として季小

五月と、と、
の、記、

楮花 △紙を草の楮の制
して紙、と、

黒ひ、を、上紙、
つ、防、

多く作る白ひ、青ひ、
み、其外数品あり

○秋葵と、州あり楮と、別
あり五月花咲、は、同一

紫蘇 赤蘇の挂、塩漬、
して食、大小二種あり

紫蘇 赤蘇の挂、塩漬、
して食、大小二種あり

紫蘇 赤蘇の挂、塩漬、
して食、大小二種あり

蒜根 夏よりてたく久食毒を
解し悪瘡を灸す

葫荽 夏実をとり生さの香を
しとれし悪臭を去

香ありきものて食て後この物を
少しくへん忽ちあき香をゆらん

痘瘡 けがきを去る法 この実

をぞんとてワズよきげのたち

まら痘瘡の色 **精実** 粘日

あきとるを **精膠** 粘日

精樹の皮を剥き水よたぐら

春そくかき去りて制す

夏切茶 茶を賣處の家
六月新茶を壺入

紙そくなく封じ壺を賣る

是を買ひ封を切て遣ふる

種植 此部は草木植る壅
培収採るの事との事

種植 先月あるは分あ
らひ今月も種べ

茄子 花の咲く
法 時分その

葉を取りて四ッはよ捨るを

に丸く灰をかきわけ其上を

人はぬきん壺を

びたくさんよなるま

壅培 橙。たちむる等は芽の
の灰羊の糞をつら

の実する事おの。菊よ

土用の後ひぐしとかくべ

灌水 此月暑氣は
日中よ水とそくげ

かまろく晩よとそく朝

とやく水とそくぐへ

収採 麻苧の燈艸席艸。
とげ右のふ此月刈る

生類 此部は六月一ヶ月の
生類のよめ

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黃
蝶に似て枯渴る云

蟬の諸聲

多くかきひきく

蟬脱

空蟬。蟬の皮とぬき

その皮とぬきこゝろへ又生

夏又虫

夏のよろくの虫と云

法よく火入よりの交りや

狂 夏は小あぶ心のまゝとあ

残蠅 蠅の秋までものころあ

金龜子 蚊蟻 鳥毛虫

蝶 俗に水道蠅といふもの夏

齋 一名地虫又根掘虫。お

糞土中にも生じ

練雲雀 卵

麦畠中より産むなりと云

かひ直下へともふ下ら守先

五六間も服旁よりと

かへてふりたてあつたむこ

のそれを練雲雀といふ

○一説ふ音をこゝろのまゝと云

非 巢ふたのむ麦刈おにけり雲雀鋪雪

川狩 等して魚と云り遊ふと

非 川物やまゝと云り汲て物製

鯖鈎

青魚。其色青し故に鯖鈎。名づく大なるものと鱈

魚と名づく、和名あふさむとつくり海中にて釣るなり

海月取

海母れともかく仲正

我々の海の月をきまらむるくくげれあひにおよぶると

必用

此部より六月より月必入用の夏養生の法等と集む

破軍

暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
午の方	未の方	申の方
夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
酉の方	戌の方	亥の方
朝六ツ	朝五ツ	辰四ツ
子の方	丑の方	寅の方
昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
卯の方	辰の方	巳の方

日刻

未の日未の刻事とま日より

出行作事

東の方へ向いて今月天道

東は行くが故あり又西北の方へ行くは用捨あり味方として

西南の味方より利あり

樂事

詩も六月徂暑と朝早く起出

て見よの蓮の花も寺院の池清らふ香ひ折く

雲起ると夕立のけりき一陣

水の窺ひ清く流音 天氣

當月の長雨ふる事すくふ雲出

雨を催せども天の陽氣つよぬ

東風よく朝あじしよの四ツ時

分より次第小南へまより西ふか

雲も晴を照つて五穀豊熟

とそれより日暮まへより次第小
 北へ替り北東風ふかるるを
 夜北より昼の照つめと吹はぬ
 露を吐く稲ふ甚よく此天氣
 つく時小折々夕立 **風** 申酉
 志て人病もよくは

吹を西まぜといふ日和つゞきて
 よし○未申より吹を沖気と
 り朝づゝ曇まど日和つゞ
 志たふも此日和長そよのそ
 其うちらとらう出せばそれより
 晴るかたかり人未申は沖より
 雲をのびて雨とまうくして
 つゞまふも長そよをほくよのそ
 ○北西の風とあまざといふ雨ちづ
 曇ど夕立もせど○東風は
 けて吹ぶ雨ふるれども夜露を
 あげぬ○東北の風久しく吹
 て空晴くると日和東風といふ

十日も北日も雨ちづ然れども
 終い雨ふるるとあまざ○東北

東南の風して曇まど **雲** 南
 湿氣にふる下地なり

小自ら雲出て東へまどまど
 雲といふ晴天はど夕立ると

志て稲 **朝霞** 東大日出を
 小宜し

あうり久しき是ひぞうはぐ
 ○朝東方あかく満天へうつり

あうり三日の内雨ちづ **夕霞**
 まど朝やけと雨といふ

西赤く南へ廻まど日和し秋の
 氣ふる北へまどとよしとす○

久しき旱の後山谷と **占候**
 かやすの翌日雨ふる

此月暑氣薄けまど五穀よほ
 かやすの翌日雨ふる 新舊の米價貴

一○白雲北斗の下小横くれば
 雨とまると月内西北風吹く稲ふ

冬月凍瘡と發せざる

妙術 當月とぐまて暑き日
大蒜と油をこすりつけ

手只は塗きい冬、疥あらず
と發せざる事 妙なり

厭患拔けの妙術 今月藜と
取り黒焼

して石灰と砥石と右三品と合
せ壺に入れて水と入米と入米の

ころりけりころり時あぶら油と
出づれば紙をこすりこすり

鰻松明け法 蒲穂を二折
油を塗り又

わいて油とめりて又二折すわら
いころ事三四度して其上と

鰻の皮を巻き又油をめり
わいて火をととせば雨中みも

消る事
そいほ

六月飲食并料理献立

好温暖のりあつひのか
物 きりのとろろふま宜し

禁生冷とくひのころころ。韭。
物 野鴨。雁。あひと食へん水殺生を

養飯 水つゆめえ△水飯ともかく
△洗飯。飯と水と洗ひ食ふ

非あ飯よかひぬとまます
瓜のまづくか其角 瀛鱈へせじ
まます

精 △乾飯△引飯△冷水よひにて
食ふ河内道明寺か作る物甚は

冷索麵 △冷麩。ゆでく冷水
△冷索麵 ぶひのころりあ

狂は此をて李白よえん索麩
の思よりほく餅のあら系 梅子

瓊脂菜 石花菜△心太 俳 志ろ系
のまねつと出せ心太 沽風

狂系のころりあころりあ
價ぞんきの菜かりしな 遠舟

料理汁 ヤサシの也
 大こん いたりの
 こらうがのこ ちんごらう

よぐまき 皮ふぐ
 こらうがのこ 一口茄子
 やまこらん 柳ぶら
 塩厂
 ますぶ

ひざし 清汁
 せん

ふさき 清汁
 こらうがのこ
 こすすご
 ちんごらう
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

こすすご 皮ふぐ
 あらふい 一口茄子
 こらうがのこ 柳ぶら
 ますぶ
 塩厂
 ますぶ

六月食物用意の品

将酉油造△納豆仕込△ひ

しは造△奈良漬製を

右の品々はとうとうつぎやう委
しく日本歳時記といふ各處出る

△水の粉 △葛粉水△砂糖水△
振舞水△さきも夏の物

△麻地酒 ○暑中△呑酒を
美濃。豊後又い南

都より出ふる浅茅酒といふ
能辨てなぬまぐべと持たはるる

干瓜の法 瓜とニツは割り
中子と去りハ

丸分やど塩と入し一夜を
うけそれた明日取り出上

下々おろくろ 干茄子法
日干きぐり

て煮る 豆塩漬乃法
米糍一斗小塩四升合せワラ

又此如くすまよ 甜瓜と
瓜は損やど茄子と

久敷貯入法 打綿と箱ヤ
うの物入

尤土用 瓜茄子の類年
の瓜は

中貯法 寒の中の潮を盛
入たくり夏

瓠瓜茄子の類を漬をけバ色
うらぶすして久しく持つ潮の渚

より五六丁も沖の潮より江
いさねうらみけよくして悪

甜瓜年中貯入極秘傳

随分大瓜の蒂より頭よばとあ
たのぞくは着て穴をあけ其口が

明礬と二与をく入木灰も批半
今まをよと都合一斗をくハ塩二

升入るけりりくを漬置キ桶よ
てまづがくを口とく風の入

ぶらやうのくをく今日漬をく
九月より未勝手ふ出してつ

べい味ひいさくま 酸将水子
攪むる事ふく

と貯法 色好赤くると枝と
りん土用の井水水ふ

漬をれ秋よ至て又水と替べ
かくのくすれが外の売紗は如

透通してやうづき少く 夏月
も皺よばとく

氷と寒中れ如く捲る

法 銅の器小厭すを泌りくる湯
を入口と能けり水れ入らぬ

ゆりみで井の底へおりくと付て
沉め半日一日や置て取上る

寒中れ氷よ火くもかり守夏の
内煮凍と捲る小葛粉もど用ふ

及びと五極よ 又法 つが水と
く出来るる

口として金も湯と泌らし其内へ
入ると湯玉のく時取上て井

戸の中へ入る 青瓜越瓜

年中貯法 瓜と四割小
して塩をぬ

て下し一日置てのら新酒乃
樽よ詰り張る置ハ年中変

らと時分の生吐 加子瓜
如くくしとく

大角豆青漬法 五升塩

二升右二品りを合せ瓜大角豆

青々として生かす但 白瓜

翌年まで青く貯置

法 赤土一鉢 塩六ホ五合右赤

取合と合せ白瓜二ツ中ごこと能く右の土めて

つち置き夏者火

凍法 鯉其外

精進物又ハ醬

煮て鉢へ水は置て

魚肉久敷貯法

の中へ胡麻の油を火へ入し置久く

煮熟物臭かく

法 煮何

置口ひろ

底右の灰上置

越先

鍋味

揚小

唐納豆法

京福

